

一五、合羽と靴と帽子

近年に一度でも丹那トンネルに這入られた方は必ず御存知の事と思ひますが、トンネルに入る時には必ず皆武装しなければなりません。どんな武装かと謂ひますと、先づ合羽を着ます。市場には餘り見受けない全部ゴム製の合羽です。それから長靴を履きます。逆も長いゴム靴で太ももまであります。それから帽子を冠ります。これも防水布のカバーが掛けてあります。一見飛行機乗りの様な恰好です。

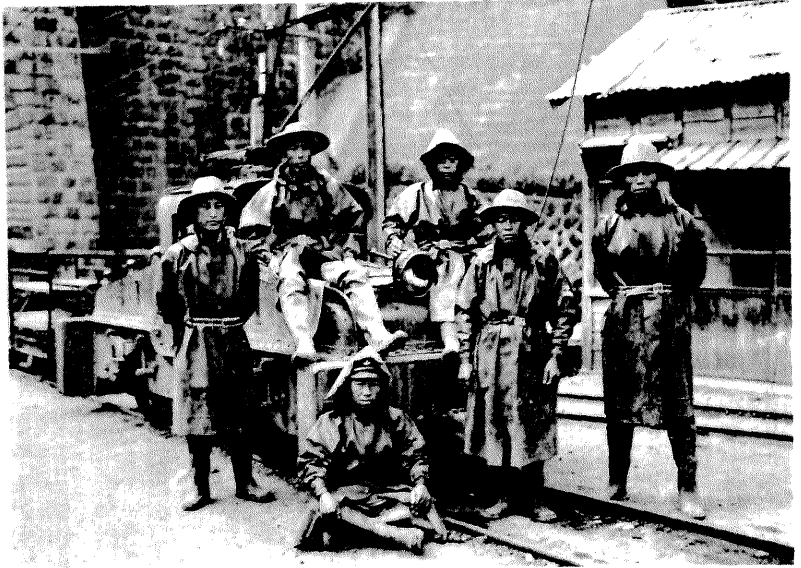
一體何故そんな風體をしなければならないのか、それは戦争ならば第一戦とも云ふべき掘鑿に従事する處は、大抵上からも下からも水に攻められるからです。又處によつては掘鑿が終つた處でも雨の様に水が降つてゐるからです。そして、いやな事には掘つてゆくに従つてこの水は附いて來るのです、ですから常に坑内で仕事をするには防水具を身につけてでなければ仕事が出来ないのです。坑内の仕事は早い話が土砂降りの雨の時に、しかも川の中で仕事をするのと同じなのです、けれど初からかうしたものを使用して居たわけではありません。

ユム合羽

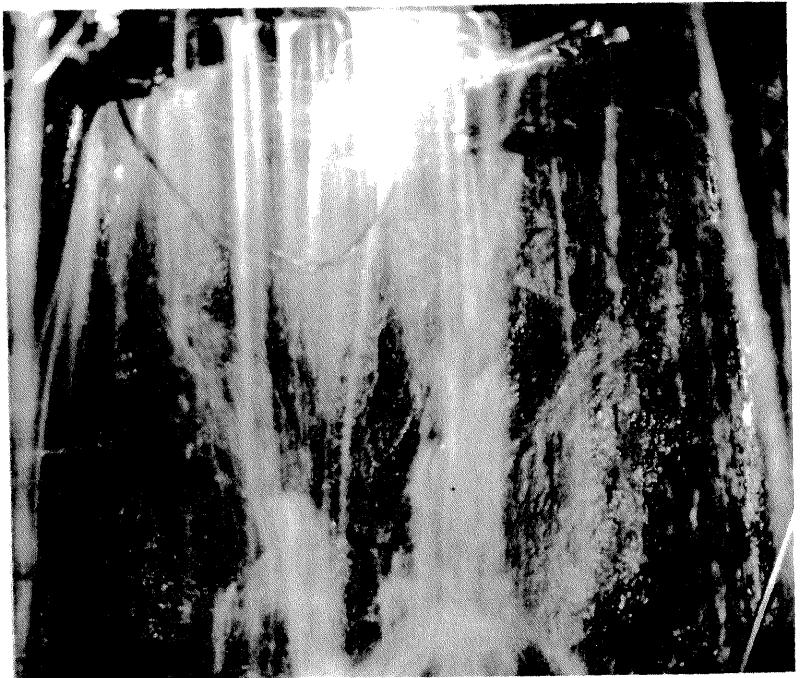
三島口では坑口から二千二百呎位迄の間は水が無いので、普通のトンネルと別に大した變りはありませんでしたが、大正八年の暮からです。底設導坑の二千三百呎邊からはどうも水が多くなつて、仕事に手間どる様になりました。そして、これではいかんと謂ふ事になり、一同に草蓑を着せました。始めの草蓑は普通百姓の使用してゐる茅

で作つたものでしたが、水に對して餘りに弱く、又或る時カンテラの灯が草蓑に移つて坑夫が大火傷をしたことがあつたりして、どうも感心出来ませんでした。丁度其の頃號令に横山と云ふ男が居て、此の男は紀州の者で彼方は棕櫚の蓑を着るが、水が浸まないでいゝと謂ふ話をしました。で早速紀州から棕櫚蓑を取り寄せて使ひましたが茅の蓑よりは幾分耐久力もある様でした。しかし思つた程の效力もありません。又陸軍の拂下げのラシヤ服を買つて来て、之れを蓑の下に着せたこともありましたが、愈ゝゴム合羽になる前には、帆布綿で合羽を作つたり、桐油の合羽を着たりしましたが、重い材料をかつぐ坑夫等は、肩の處がすぐ破れて仕舞ひます。又潛水夫の服を使つて見た事もあります。此の頃のことですが、坑夫達はきん玉を濡らすと冷え込んでいかんと謂ふので、特にフランネルできん玉を確り包み込んで入坑したと謂ふ珍談もあります。

三島口では最初に蓑を着たのですが、熱海口の鐵道工業會社では以前千葉縣の鋸山トンネルの掘鑿をやつた時に棕櫚蓑を用ひ、それにカンテラの火が付いて、坑夫の一人が全身大火傷をした經驗があつたので、蓑は始めから全然使用しませんでした。熱海口で始めて防水具として使つたのは漁師が着る様な油の引いてある袖無し合羽です。俗に謂ふチャンチャンコと謂ふ奴です。しかしこれは水は弾きまますけれど、湧水の溫度が低い爲に、體が冷え込むので餘り感心出来ず之を綿入れの袖無し合羽に改造しました。これは坑夫の中に越中の男が居て、綿入れの合羽を北國では着ると謂ひ出したので、やつてみたのですけれど、一度水に濡れると始末が悪いので、これも長くつどかずやめてしまひました。



坑々愈てつ成装武



水湧き如瀧の

其後熱海口も三島口で着る雨合羽や毛布製の袖無しと云ふ様なものを作りましたが、毛布の袖無しは比較的工合がよく、冷える事もなく水も弾くので、之れに袖をつけて着て見ました。しかし着てゐて少し重いのと、監督者の分はとにかく、労働者の分は一月もたないで、之れも結局満足出来るものではありませんでした。

こんな工合で兩口とも、湧水が段々ひどくなるにつれて、水装束には、随分苦勞をなめました。大正十二年の春頃だと思ひます。江尻に住む深井と謂ふ男が、三島口に學生のマントを行商にやつて來ました。其の者に試しに、ゴム引の合羽を注文して見ましたが、之れが抑々今日用ひて居るゴム合羽の前身となつたのです。此のゴム引は結局不成功でしたが、今度は生ゴム製の合羽を同人に作らせて見せました。之れは水が漏らない點ではいゝのですが、取扱が厄介です。そこで次に裏に布を付けさして見ましたが、これはどうやら防水具として完全なので、段々着られる様になりました。當時一着十五六圓もしましたし、重いものですから、坑夫なども初めはいやがりました。が、湧水の烈しさには勝てず已むなく段々之れを着るやうになりました。此の最初の不完全なゴム合羽も、水がはいらぬ様、袖口は折り返しにして紐でしめ、襟には裏をつけ、材料をかつぐ肩には厚いゴムを貼り付け、腹はバンドで締める様にし、ボタン穴も水がはいらぬ様返りゴムを貼り、ポケットも水がはいらぬ様内側にする等、細部に亘り、實際の經驗から、改良が施され、漸く今日見る様な完全なゴム合羽が出来上りました。此の注文は、前記の深井氏が、全部引き受けてやつたのですが、同氏はこれで一家を爲し清水市の市會議員などをやつて活動して居るさうです。此のゴム合羽は同氏の一手販賣だつたのですが、其後權利を譲つたさうです。併し氏は、東西兩口の請

負人に納めるものだけは、自分の成功の基だつたのだからと謂つて、他人に渡さず今日迄自ら納入を引受けて居ります。

靴 と 帽 子

靴もゴム合羽を着た頃からはき出しました。當時は社會一般にゴムの長靴が流行し出した時でした。それで早速これを使用させた處が膝を折る時に工合が悪いし、普通のものでは少し短いので水が入る。そこで、ボックスで作つたらと計畫しましたけれど餘りに高價です。そのうちに三島に森崎某と云ふ靴屋が居て、これが護謨靴屋を開業してゐたもので、これにナマゴムの長靴を注文したのが今日の長靴のはじめです。これも改良が大分加へられましたが其の主な點は靴の底で、どうも勞働がはげしいので底がいたみ易く、こゝを二枚も三枚も貼りつけて今日のような工合になつたのです。一足四圓五十錢位でしたが高い盛りには十五圓もしました。

帽子の使用も合羽や靴と略同時の様です。始めは普通にある饅頭笠を冠つて居りましたが水が漏るので今度ハスガ笠に防水布をつけて使つて見ました。これは上下左右を見るのに不便で、満頭型麥藁帽子に防水布を掛け後の方を切つたものを作つて今日使用してゐる帽子を得ました。鏝が一方が廣く一方が狭くなつて居ります。あれは頭巾を冠るときに帽子が邪魔にならない様にしたのです。

こんな合羽や、靴の様な簡單なものでも、實地に役立つものを造り上げる迄には、種々な工夫と經驗が必要なのです。